［特集｜国際学会での思い出］

世界水産学会議 World Fisheries Conference に出席して

経営ビジネス学科
日高　健

横浜で開催された第5回世界水産学会議に参加した。日本国内で開催される国際学会に参加するのは2回目である。この会議は、２００８年10月20～24日に横浜市のパシフィコ横浜会議センター・パシフィコ横浜国立大ホールを会場に、世界57カ国から１５９０人が参加して行われた。母体となるのは世界水産学協議会である。この組織は、アメリカ、イギリス、オーストラリア、インド、パキスタン、および日本の水産関係学会から構成されるもので、他に多数のオブザーバー国が参加している。第1回会議は１９９２年にギリシャで開催され、その後4年ごとに世界各地で開催されている。水産に関するほとんど全ての研究分野を含み、世界各国から参加を得て、4年ごとに開催されるわけであるから、言わば水産研究のオリンピックのようなものである。そもそも水産学という分野は、水産海洋に関わる自然科学から社会科学や人文科学まで、海洋の物理や化学、生態学やバイオテクノロジー、経済学や社会学といった、極めて幅広い領域を含んでおり、他の学会から見たら化け物のような研究分野である。この幅広い研究分野を九つのセッションに分けてテーマを設定し、世界中から発表者を募り、研究発表と議論が行われたのである。セッションの一つ一つが一つの学会や研究領域に相当している。

22日にはパシフィコ横浜国立大ホールにおいて記念式典が催された。これには天皇・皇后両陛下がご臨席された。これまでいくつもの国際学会に参加したが、国家元首クラスの来賓を迎えた学会は初めてである。記念式典の会場へは、厳重な警護と監視をくぐらないと入れない。両陛下のお顔を少しでも近くから拝見しようと、満員の会場の前の方に腰を下ろした。世界水産学協議会の会長である隆島史夫教授（東京海洋大学）や何人かの挨拶のあと、天皇陛下から、海の環境を守り、水産生物を持続的に利用していくためには世界の水産研究者が国境を越えて協力することが必要とのお言葉があった。思えば、天皇陛下は魚類学の研究をされており、何でも約30本の論文も執筆されているそうだ。ハゼが専門だったかと思う。皇太子は海運のご研究をされており、一度ご下命で福岡県における近世の海運業について資料を収集したことがある。天皇家は海と縁が深いようだ。

大会自身は、51のサブ・セッションに分かれ、７２９件の口頭発表、５５０件のポスター発表が行われた。これに合わせて五つのサテライトシンポジウムも開催された。筆者は、このうちFisheries Economics and Social Science（水産経済と社会）のセッションで口頭発表をし、また座長を務めた。また、サテライトシンポジウムでは「まぐろ養殖の現状と今後の展開」において口頭発表を行った。いずれもマグロ養殖経営に関する発表である。一週間に二つも英語でマグロ養殖に関する発表をするはめになった。

セッションでの発表タイトルは、Comparison of bluefin tuna fisheries management, tuna aquaculture and their interaction in the major producing countriesである。マグロ養殖の原魚を漁獲する漁業と養殖業者さらには輸出業者との関係を類型化して、どのようなビジネスシステムが競争優位を持つかという発表である。セッションでは発表時間はわずか15分で、質問時間も短く、意を尽くした発表はできなかった。でもこれは国内の学会でも似たようなものだろう。観客は30人位で、三分の一が日本人。当然、日本人どうしのやりとりも英語。

シンポジウムでは、Comparison of the business systems composing tuna aquaculture in the worldというタイトルで発表した。これはセッションとは異なり、マグロ養殖に絞ったシンポジウムであり、発表時間も30分。個別の質問時間に加えて総合ディスカッションの時間もあり、議論の時間はたっぷり。観客は約１２０人、８割は日本人だったが、質疑討論はもちろん英語である。セッションの参加者は研究者と思われたが、シンポジムではマグロ業界からも多数来ておられた。マグロ養殖に関する世の関心が高まっている時であり、議論は白熱した。また、会場の外やシンポジウム終了後にもあちこちで議論が行われていた。

国際学会のときに重要なことは、たくさんの知り合いを作ることである。手っ取り早いのがバンケットであるが、どうもこれは苦手だという人が多いと思う。今回も初日にウェルカムレセプションがあり、最終日の前日に交歓会があった。どうしても知っている人あるいは日本人と話してしまう。全く知らない外国人と一体何の話をすればいいんだろう。見ていると、始めてあったらしい人たちが握手しながら話し込んでいる。セッションなどで質問をした人や少なくとも発表を

聞いた人だったらまだ話の接ぎ穂がある。シンポジムの後に懇親会があったら、きっと盛り上がっていたことだろう。思えば、昼間にできるだけ話しかけて、話の種を蒔いておけばとっかかりができる。しかし、英語が苦手な者にとって、大ぜいの観客の前で、英語で質問するのはなかなか勇気のいることである。まずは発表の後に直接質問をすることだ。それでも話しかけにくい時にはポスター発表を利用するとよい。発表者は話しかけられるのを待っているのである。今回も、メキシコのマグロ養殖に関する情報を探していたので、近いテーマで発表しているメキシコの研究者に話しかけ、前年に調査に行ったこととデータを探していることを話し、協力を依頼した。そして後でメールをいただいた。思えば、これまでも国際会議や国際学会で知り合いを作り、調査のきっかけとしたり、直接訪問の約束をとったりしてきた。発表の後やポスターの前で話すようにバンケットの時も話せればいいのだが、どうもこればかりはうまくいかない。今回も昼間話しかけた人達を探しながら交換会会場を探し回って、ゆっくり料理も酒も味わえなかった。ほっとしたのは交歓会が終わって、パシフィコ横浜の近代的な建物街から桜木町駅前の古びた居酒屋に腰を下ろしたときだった。